みき「なんだって！」

千歌（M）「私は浅はかだった。もうすぐ雨季にさしかかる。川普請はいったん休止になる。与三さんが帰ってくると、そんなことばかり考えていた……」

叔母「堤が切れちまったら、これまでやってきたことが水の泡だよ」

千歌（M）「その日は、福助さんと母上様を伴い、叔母様が来ていた」

伝右衛門「また『竜神の喉口』か。あそこは水の勢いが強く、いくら手を入れても元の木阿弥、長雨のたびにやられちまう」

叔母「備前様は大船ではなかったのかい？」

伝右衛門「江戸に戻っておられる」

千歌「ちかは、こうしておる今も堤におります与三さんが、心配でなりませぬ。流されてしまわぬかと」

叔母「おい、与三兵衛のことは口に出すなと言ったはずだよ」

福助「与三さんは、おちかさんにとって兄上

も同然。心配するのは当然にございます。私が、村々へ助け人足のお願いに参りましょう」

たえ「福助、それがよいでしょう」

伝右衛門「あーもう、頭の痛いこっちゃわ。じつはな、御代官様より怠慢やと叱責を受けたばかりなんや。わしの持ち分だけが、遅々として進まぬ」

叔母「与三兵衛があかんのやないか。現場をうまく差配できとらんのや」

小太郎「叔母様、失礼を承知で申しますが、与三さんは誰よりも長く働くし、無言の背中に、みながついていっとります」

叔母「小太郎は黙っとれ。おまえはいつも与三兵衛の肩を持つ」

伝右衛門「もうよい、騒ぐでない。小太郎も与三と同じ、出水で親を失っとるし、小信川がうらめしかろう。しかし、はてさて、どうしたものか……」

たえ「ほんに昔から『竜神の喉口』は、呪わ

れたようにより切れますこと。うらめしいことです」

伝右衛門「いや、たえさん、そうか、そうかもしれぬぞ。こいつは案外、呪われとるやもしれぬ。あるいは祟っておるやも」

たえ「祟り？」

伝右衛門「叔母様、そういえば中之坊に、ご高名な御坊さんがおられましたなぁ」

叔母「了誓（りょうせい）さんかい。南無阿弥陀仏と称えれば、一切の悪霊が逃げ出すという」

伝右衛門「ここはひとつ、御坊さんに頼まれてはくれぬか？」

ＳＥ　神社の鈴を鳴らす

千歌（Ｍ）「その後（あと）、嘘のように長雨は止み、晴れ間が広がった。みな、これは御坊さんの神通力だと触れ回った。私は独り、気づけば真清田（ますみだ）神社にいた。あのとき、私の中には鬼がいた。いっそ堤が切れてしまえば